

フラメンコ世界への小旅行（初心者にもわかりやすいフラメンコ・ガイド） Un paseo amable por el mundo del flamenco

著者：ホセ・アンドレス・アンギータ＝ペラゴン

José Andrés Anguita Peragón

出版社：エディトリアル・オクタエドロ Editorial Octaedro

出版年：2009年

ページ数：208頁

読者対象：フラメンコ初心者、フラメンコに関心のある人、一般

レポート作成：村田名津子

概要

フラメンコ初心者にとって、わかりやすい入門書。著者はフラメンコの普及に尽力するアンダルシアのフラメンコ同好会のメンバー。前半部分でフラメンコの専門用語や曲形式を解説し、後半部分でフラメンコの起源や19世紀以後の発展について述べる。本書のコンセプトはフラメンコについて、ジプシーだけに代々伝えられた口承芸術といったかつての概念を見直し、スペインの多様な文化が融合された上に培われたアンダルシアの芸術という新しい概念を打ち立てることだ。

目次

第1章 序章

第2章 伝統的な曲形式分類

第3章 マイレーナの曲形式分類

第4章 コンパス（リズム）を基準とした曲形式分類

第5章 曲形式について

第6章 フラメンコ用語

第7章 フラメンコの歌詞によく使われる詩節

第8章 アンダルシア方言

第9章 ジプシーの言葉と隠語

第10章 声

第11章 フラメンコ曲形式リスト（アルファベット順）

第12章 フラメンコ前史

第13章 フラメンコはアンダルシアの民のもの

第14章 カンテ黄金の鍵とパボン杯

第15章 ロマンセ、トナー・カンペシーナ、ナナ

第16章 農村から都市への出稼ぎ

第17章 農村から都市への移行期

第18章 アサルキアから都市へ

第19章 すべての民族はファンダンゴを持っている

第20章 スペインとアメリカのフラメンコ風の民謡

第21章 フラメンコ・アーティスト紹介

本書は、21章で構成されているが、内容によって4つに分けられる。

フラメンコの専門用語と曲形式の紹介（2章～11章）

フラメンコの起源についての著者の見解（12章～14章）

フラメンコの歌の成り立ち（15章～20章）

巻末：フラメンコ・アーティスト紹介（21章）

それぞれ内容は以下の通り。

フラメンコの専門用語と曲形式の紹介

初心者になじみのないフラメンコ専門用語、アンダルシア方言やジプシーの言葉について解説。歌詞、詩節、コンパス、さらにお勧めの演奏家についてもそれぞれ記載。また曲形式については63の曲形式を網羅し、アルファベット順に並んでいるので検索しやすい。

フラメンコの起源についての著者の見解

フラメンコはスペイン各地に生じた民謡が礎となり、19世紀にアンダルシアでフラメンコに発展したと、著者は述べる。とりわけ、ジプシーというひとつの民族だけではなく、中世以前からイベリア半島に存在し影響を与えてきたすべての民族、宗教、人種、（たとえば、ムーア人、ユダヤ、カトリック、黒人、ラテンアメリカの人々）の

文化が融合されたものがフラメンコだと強調している。フラメンコがジプシーだけに代々伝えられてきたというフラメンコ界の大御所アントニオ・マイレーナの古典的な解釈を見直そうという姿勢である。

フラメンコの歌の成り立ち

ここでは、さまざまな歌がフラメンコになっていく過程を説明する。ロマンセや子守唄、それに19世紀以降、農民が都市に出て様々な仕事に従事するようになり、その仕事を歌った労働歌がフラメンコになっていくさまを紹介する。

巻末：アーティスト紹介

250人のアーティストを網羅。19世紀の古典的なアーティストから、現代に活躍するアーティストまでを、ひとりにつき5行から10行で紹介している。

所感

フラメンコは今や、国際舞台で他のジャンルの音楽とコラボレーションされており、その魅力を世界に発信し続けている。昔ながらのジプシーだけに代々伝えられてきたというイメージはすでに過去のものとなり、日々進化している芸術である。本書には、こうしたフラメンコの魅力を伝えたいというアンダルシアの人々の強い思いがあふれている。

2012年1月に日本で出版された『はじめてのフラメンコ』（イカロス出版、2012年）によると、日本は本国スペインに次いでフラメンコ愛好者が多い国だという。都内にあるタブラオでは毎週のようにライブが催され、フラメンコ教室の公演も当日券が残らないほど盛況だ。しかも日本のフラメンコ愛好者は観て聴くだけでなく、実際に踊ったり歌ったりギターを弾いたりする人が多い。アルゼンチン・タンゴ、ベリーダンス、フラダンスとダンス市場の多様化にもかかわらず、今やフラメンコは日本で不動の人気を得ている。

だが、その一方でフラメンコに関する書籍は少ない。初心者に舞踊を手ほどきする本はいくつかあるが、フラメンコの起源やその後の発展の歴史について書かれた本は、『フラメンコの歴史』（浜田滋郎著、晶文社、1983年）、『フラメンコ読本』（イスパニカ編、晶文社、2007年）、『フラメンコのすべて』（有本紀明著、講談社、2009年）があるだけである。

本書は、用語や曲形式の解説がわかりやすく、初心者がフラメンコの公演に行く際に携帯できるなど、機能的である。そればかりでなく、アンダルシアというフラメンコ発信の地のフラメンコ観を知ることができる。ただし、本書はフラメンコの起源や歴史について解説しているが、上記3冊のような研究書ではない。系統だって論理的に解説するというより、どちらかという軽い語り口の歴史風エッセイだ。入門者から中級者を対象とした、フラメンコの曲をめぐる歴史散歩と銘打てば、日本の読者も求めやすいだろう。

【翻訳する際の注意点】

注意点は2点ある。ひとつは、試訳を見てももらえれば分かるが、論理的な筋道だった文章ではないということ。もしかすると初めから一冊の本として出版するのではなく、歴史散歩として雑誌などで連載するのもいいかもしれない。もうひとつの注意点は、スペインでは周知の歴史的事象であっても日本ではなじみのないものが少なくない。これらには註を入れて説明を補う必要があるだろう。

【著者の経歴】

著者ホセ・アンドレス・アンギータ＝ペラゴンは、現在、アンダルシア自治州ハエン県アンドゥハルの小学校の教師を勤める傍ら、地元のフラメンコの同好会ロス・ロメロスのメンバーとして、フラメンコの普及に尽力している。著書に、「フラメンコ 音楽的栄枯盛衰」（1999）がある。本書の序章のはじめに、23人の日本人が協力してくれたことへの謝辞がある。これら日本のアーティストの中にはロス・ロメロスの会員が含まれる。ちなみに、ロス・ロメロスは、2003年に、東京フラメンコ倶楽部に対して、フラメンコの普及に貢献したとして第3回エル・ガジーナ賞を贈った。

試訳 第12章 フラメンコ前史より（108～111頁）

われわれは、フラメンコの長い道程を歩いてきた。ここで、フラメンコという言葉の語源について見てみよう。すでに、前の章で私はフラメンコに関することには、確証のあることはほとんどないと述べた。それは、曲形式の名前やフラメンコ用語についても同じである。とりわけフラメンコ用語については以前からよく指摘されている。

曲形式の名前やフラメンコに関するものについて、ここで論じる気はない。実のところ、フラメンコという言葉自体がどこから来ているかについてもあまり興味はないのだが、幾つかの説を紹介しよう。

・フラメンコ：フランドルの歩兵連隊の兵士から由来した言葉。おそらくその制服が派手だったからではないか？

- ・フラメンコ：水鳥フラミンゴを連想させるポーズをしたフラメンコ・アーティストにフラメンコと名付けたことから。
- ・フラメンコ：「粋な」という意味でアーティストを「フラメンコ」と呼んだことから。
- ・フラメンコ：「炎」を意味するflamaから。
- ・フラメンコ：「からいばりする、反抗的な、騒乱好きな」の同義語であることから。
- ・フラメンコ：アラビア語で逃げた農民を意味するfelag menguから。

私は最後の説を支持する。後述するように、追放令を逃れてジブシーの中に身を隠したであろう相当数のモリスコ（カトリック教に改宗した、あるいは改宗したふりをしたイスラム教徒）の農民がいたからだ。

ところで、ここからは中世のスペインで、特に7世紀から16世紀のアンダルシアで、ムーア人、ユダヤ人、キリスト教徒らがいかに共生していたかについて述べる。そこでは、それぞれの伝統、慣習、民謡も共有されていた。この700年を超える時間の流れのなかで、様々な文化が育まれ、それに伴い、様々な伝統や娯楽も存在していた。アブド・アッラフマーン2世（822-852）の治世に最盛期を迎えたコルドバのカリフの栄華の時代を思い出してみよう。その時代は多くの思想家、科学者、芸術家を輩出した。その中に、「エル・パハロ・ネグロ（黒い鳥）」と呼ばれたアブ・ハッサン・アリ・イーブン・ナフィ・ズィルヤーブ（789年イラク生、850年コルドバ没）がいた。このアラブの音楽家はイスハク・エル・マウシリ（767-850）の弟子であり、アブド・アッラフマーン2世の治世にダマスカスからコルドバに移ってきた。スペイン・ムスリム音楽における様々な伝統の創始者は、1万以上もの歌に精通し、この時代の音楽を大きく変える改革をたくさん行った。また、彼はリュートを5弦に加工した人物でもある。ちなみにリュートの弦はライオンのお腹で作られていた。

前の章でギターが経てきた変化について話した。ここでは、詩人でマラガの音楽家であるピセンテ・エスピネル（1550-1624）について述べておこう。彼は、ギターを6弦に加工した人物である。詩人、人文学者、小説家、音楽家であった。若い頃に生まれ故郷のマラガで音楽と文学を学び、後にサラマンカ大学で学問を修めた。8音10節の詩節を考案した。面白いことに、この詩節はスペインとラテンアメリカを往来することで出来上がったイダ・イ・プエルタ（「往復」の意）の詩節と同じだ。

偉大な音楽家「黒い鳥」は、コルドバで最も優れた文化的な学校を作り、カトリック両王さえもその影響を抑えることができないほど、スペイン全土に影響を与えた。

この著名な音楽家の理論はフラメンコで実践されている。それは、決まった歌詞には決まったメロディを付けるべきで、他の歌詞のメロディでは合わないという理論である。

もし、ズィルヤーブがダマスカスから来たのなら、彼と共にインド風の音楽も一緒についてくると考えるのは当然ではないか。

一方、フラメンコの曲のなかに、ユダヤ音楽の片鱗を見つけることは珍しいことではない。ペテネーラというフラメンコの曲形式にはユダヤ教の葬式で使われる儀礼音楽の一節がしばしば見られる。

かわいそうに、あのひと遠くに行ってしまう
誰もがあのひとのことを忘れてしまう
なぜなら目に映らないと、心は忘れてしまうから
どんなに遠くに行ってしまうとも
私はあんたを決して忘れない

賢いお方に伺いたい
なぜ愛を忘れてしまうのか
泣きながら答えてくださった
（私の心の満ち引きのように）
誰がそれを教えてくれるのか
愛が私を苦しめる

また、グレゴリア聖歌からの影響によってフラメンコはさらに豊かなものになったが、それはかなり前のことであった。古くは、レコンキスタのすぐ後であった。レコンキスタが終わっても、イベリア半島ではモサラベ（ムスリム支配下のイベリア半島でキリスト教を信仰した者）の儀礼でキリスト教の儀礼が実践され続けていた。だが、一旦モサラベの儀礼がローマ典礼に移行すると、フラメンコにグレゴリア聖歌の要素が取り入れられるようになった。ここで私は少しグレゴリア聖歌について話そう。

この古い教会音楽は、グレゴリア聖歌の名でカトリックの儀礼の典礼で歌われた音楽であるが、その起源はかなり古い時代まで遡る。この教会音楽の名は教皇グレゴリオ1世（600年頃）の名に由来する。グレゴリオ1世は教会博士に列せられた人物だが、もともとは法を学び、570年頃市長職を得た。引退後修道院に入り、578年に司祭になり、590年に教皇に選出された。

グレゴリア聖歌のいくつかの片鱗を、歌い手エンリケ・エル・メジーソのラス・マラゲーニャの中に見出すことができる。このカンタオール（歌い手）は1848年12月1日にカディスで生まれ、父が双子だったためにこの呼び名を付けられ、エンリケ・エル・デル・メジーソ（双子の息子のエンリケ）と呼ばれ、その後何年もたち、エンリケ・

エル・メジーソ（双子のエンリケ）と省略されて呼ばれるようになった。

家業は畜殺業で、彼は父から仕事の手ほどきを受けた。彼は歌が好きで才能もあった。彼は今まで輩出してきたカンタオールのかなかでも最も才能があったとされている。

さらに、フラメンコに影響を与えた音楽については、ズィルヤーブやジブシーによってインドからの影響があったと言われている。また、イダ・イ・ブエルタの歌として知られるラテンアメリカのメロディやリズムからの影響もある。

まとめてみよう。アンダルシアにはいくつかの特性がある。人々の気質、気候……

こうした特性は他の文化（ローマ以前、ローマ、イスラム、ユダヤ、ジブシー）を受け入れる懐の深さや混ぜ込む気質を備えている。そうした特性が音楽的な土台を作り、長い時を経て、私たちがフラメンコ芸術として知るものとなった。

ここで再びアンダルシア人の特質に注目しなければならない。彼らの気質が上記のようなものでなかったなら、スペインのどの地域からでもフラメンコは生まれていた可能性があったから。もしフラメンコが文化の融合の産物でしかないというなら、アンダルシア以外の他の地域でどうして生まれてこなかったのか、説明がつかない。なぜかという、スペイン全土で前述のように文化の融合が行われていたのだから。にもかかわらず、フラメンコは唯一アンダルシアでしか生まれなかったし、アンダルシアでしか育まれなかったし、アンダルシアでしか発展しなかった。

だから、「フラメンコはどこから来たか」という際限のない質問について、フラメンコはどこからでもない、アンダルシアの賜物なのだと答えるしかない。すなわち、アンダルシアに馴染みがない、アンダルシアに無縁の文化からは決して生まれてこないものなのである。

その結果、フラメンコは何であるかという問いについては（もし、私がこれまで述べてきた話に共感してもらえらば）アンダルシアのあらゆる文化の融合の結果であり、フラメンコ・アーティストたちの芸の賜物であると言いたい。他の芸でも言われるように、アーティストたちの演奏や芸が、その芸術を育てるのである。

Source URL:

<http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/huramenkoshi-jie-henoxiao-lu-xing-chu-xin-zhe-nimowakariyasuihur-amenkogaido-un-paseo>